

社会教育施設における博学連携事業を活用した授業実践

— 中学校理科第2分野の学習内容に対する発展的学習活動の展開 —

199327

大海 ほのか

福江 純 教授

1. 研究にあたって

1.1. 研究動機と背景

本研究に取り組もうと考えた最大のきっかけは、学芸員資格を取得するための博物館実習で地域の学校と連携した授業や教材作成の準備などに関わるなかで、子どもたちが実物に触れ目を輝かせている様子を目の当たりにし、学校での授業はこのようにあるべきだと非常に感銘を受け著者自身も実践したいと考えたことである。しかし、公教育におけるの機会の不均等や、博学連携には時間と手間がかかってしまうことなどから、博学連携事業の推進のためにはまず現状の把握が必要であると感じた。また、実習校での授業で生徒が学校の授業を退屈なものと感じているのではないかと感じ、これらの課題の解決を目指したいと考えた。

平成29・30年の学習指導要領改訂に際して、生徒の資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践が求められており、理科の教科教育において科学的な探求のために必要な資質・能力を育成するためには知識と経験を結びつける体験型学習が有効であると考えられている。このような背景から、博物館と学校教育の連携には双方メリットがあると考えられているものの、教員業務の多忙化や博学連携事業の情報不足などが原因で、博学連携事業を利用した学校での授業実践はあまり多くないというのが現状である。そこで、この問題について教員の立場で実際に博学連携に取り組むことで、解決への糸口を見出したいと考えた。また、学校実習で実習校の生徒の様子を観察していて、授業に対して受動的な姿勢をもつ生徒が多いことが気になったことから、学習のなかでワクワクしたりドキドキしたりする体験ができれば、学習に対する生徒の意識を変化させることができるのではないかと考えた。

1.2. 目的

本実践課題研究の目的は、実物教材を活用した授業を行うことで生徒の学習内容への興味・関心を高め、科学的な資質・能力の育成の一助とすること、および博学連携事業の現状を把握し事業推進のために有効なシステムを、学校と博物館双方の視点から検討することの2点である。

1.3. 研究対象と資料について

本研究では大阪市立自然史博物館様にご協力をいただき、博物館の貸し出しキット「ホネ(アライグマとニホンジカの頭骨セット)」を利用した肉食動物と草食動物の頭骨の観察を実践に

取り入れた。実践対象はA中学校第2学年の6学級の生徒約240名であり、このうち研究対象は著者が授業を担当した4学級の生徒約160名である。

2. 実践研究

2.1. 研究方法

本研究の授業実践にあたり、A中学校(以下、実習校)の教職員・生徒の皆様および大阪市立自然史博物館(以下、博物館)の学芸員・教育担当者様にご協力いただき、中学校第2学年理科第2分野〈生命〉の単元「動物の体の共通点と相違点」の導入として、博物館の貸し出しキット「ホネ(アライグマとニホンジカの頭骨セット)」(図1)を活用し、資料の観察と調べ学習を融合した発展的な学習活動を計画した。実践では貸し出しキットを3セットお借りし、「食物の違いと動物の体のつくりの関係について調べる」という授業目標のもと、ほかの生徒と分担して調べ学習を行い、情報を共有しながら授業プリントをまとめるという協働活動を軸に展開した。実践後、生徒を対象にした授業アンケートの結果から生徒の学習への興味関心の向上がみられたかどうかなどを調査するとともに、学校・博物館双方の視点から実践の反省と博学連携推進への取り組みの検討を行った。



図1. 貸し出しキット：ホネ(アライグマとニホンジカの頭骨セット)の内容物
(画像引用元：大阪市立自然史博物館ホームページ)

2.2. 結果と考察

実践後に生徒を対象に実施したアンケート調査の結果から、本実践を通して学習内容に興味をもてたと回答した生徒は約77.5%にのぼり、実践の効果が検証された。また、今回の実践で教師の立場から博物館の貸し出し資料を利用して見て、利用への敷居の高さの誤解や教師の多忙がその一因であることや、広報活動の活性化が必要であることが明らかになった。また、これからの博学連携事業は従来の取り組みのほかに、学校にいながら博物館を利用できる方法を模索していくことで、学校と博物館の協力関係をより一層強められる可能性があると考えた。

報告書本文では、上記に要約した実践課題研究の内容を詳細に述べる。